『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題　九

小谷成子・野崎典子

今回の翻刻は、「『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題八」（愛知県立大学文学部論集　国文学科編　第五六号　平成二〇年三月発行）につづくものである。

凡例

一、これは愛知県立大学附属図書館蔵『和泉流秘書』の翻刻である。

二、底本を忠実に翻刻することを原則とするが、通読の便宜や印刷上の制約を考慮して、次のような処理を施した。

1、原文に句読点はないが、詞章の終わり等に一字分程度の空白をおいた。

2、丁付けは省いた。

3、曲中に付した〈・シテ・アト・――等については、朱書・墨書の区別はしなかったが、朱書きの傍書に限って（）で括って示した。

4、誤記と判断し得る場合も、修正しないで（ママ）と傍記した。

5、漢字の字体は通行の漢字に改めた。ただし、異体字、略体字は本字にした。合字は開いた。
　　七七→喜　厂・厂→雁　〆→シメ　ゟ→より
6、宛字も多くみられるが、そのままとした。
　　竹類（畜類）　御行所（御教書）　字文（呪文）

翻刻

和泉流秘書　七冊之内六

目録

文山賊　福ノ神　、合柿　瓜盗人
要坊（ママ）　靱猿　鎧腹巻　船渡聟
鎌腹　末広　塗師　茶壺
瓢ノ神　入間川　富士松　梟山伏
弓矢太郎　ひくす　悪太郎
〆　拾九番

ベ やるまいそ〳〵　ア やれ〳〵　ベ やるまいそ〳〵　ア やれいと言ふに　ベ とつといた扨〳〵
残り多ひ事をした　ア 今迄人影ケか見へたか何とした　ベ そちかやれ〳〵と言ふたに依て追ひやつた
ア イヤ爰な者か　そちハ仲間の合い言葉をしらぬか　ベ イミヤ何をも知らぬ　ア やれいと言ふハはぎ取
てやれいと言ふ事ちや　ベ 身共ハ其様な事とハ知らすそちか近付てもあらふと思ふて夫故追遣った　ア そち
と出合て終に仕合をした事かない此後ハ申通せんそ　ベ 申通せんと言ふて其弓矢を捨たハ身共かつらへ投付たの
ちやな　ア おんてもなひ事　ベ そちか申通せすハ某わ申談せんそ　ア 申談せんと言ふて鎧を捨たハ身共
かつらへ打つけたのちやな　ベ 言ふ迄もない事ちや　ア 堪忍ならぬ　さしちかへて死ふ　ベ いさこい
ア さあこい　両人　ア イヤアミ〳〵〳〵　ベ 先待て〳〵　ア 待とハ何と　ベ 後ロかかけちや　ア
とれ〳〵誠ニかけちや　ベ ちとゆるめて呉い　ア 心得た　ア 後ロかいばらくろちや　ベ とれ〳〵誠
ニいはらくろちや　ア ちとゆるめて呉い　ベ 心得た　両人　ア イヤア〳〵〳〵　ベ 何と思ふそ　こう取組
た処を待罷に見せたい事ちやナア　ア 成程此けなけな様子を見せたいわいやい　ベ 何と思ふそ　こふして死
たらハ犬死ころにもふみつふされたかと思ふてみなの者かなけくで有ふ　ア そうて有ふ　ベ 何と書置をかい
て死ぬまいか　ア 是ハよい所江気か付た　乍去この取組た手ハ何としてはなそうそ　ベ 夫は声を懸て三度目
の声てはなそう　ア 一段とよかろう　両人　ベ さあ〳〵〳〵　ベ とつこい　ア ぬかる事てハないそ
ベ さあ〳〵是へよれ　ア 心得た　ベ 扨汝ハ硯紙を用意したか　ア 其様な物ハ用意せなんた　ベ
扨〳〵そちハふ心懸な者ちや　某ハ仕合をした時書分て取ふと思ふて硯紙を用意した　ア 扨〻汝はたしなみのよ
い者ちや　ベ 扨文しよふ八何と書そ　ア されハ何とかよかろうそ　ベ 一筆啓上せしめ候と書ふか

ベ　女共の方へやる文に其様なかたい事か何と書るゝ物ちや　一筆申存候とかけ　ベ　今死るに存候処てハあるまい　兎角文章ハ身共にまかせておけ　マ　よいよふニかけ　ベ　心得た　マ　ハアゝ書ハ〳〵立板に水を流すよふニかくハ　ベ　さあ書た　マ　とれ〳〵よふて聞せい　ベ　心得た　扨も〳〵只かりそめに家を出て山たちを仕そんし人の物をハ取らすしてけつく年〳〵口論しひくなよ我ものかれしと刀のつかニ手をかくる　マ　心得た　ベ　是ハ何とする　マ　刀のつかに手を懸るとハ言、わせぬか　ベ　扨ゝそちハ用かい者ちや　是からハくときに書た　汝も是へよつてよめ　マ　心得た　ベ　かまへて〳〵当りの人〳〵にけなけニ死にたると語り伝へて給ふへしと

両人　ベ　かきなかしたる人くきの跡にとゝまる女房や娘子とものほへん事思ひやられてかさしさよ（ママ）　二人ナク　マ　扨〳〵哀れニ書たナア　ベ　何と思ふそ　こふして死るハ犬死ちや　何と仲を直すまいか　マ　そちさへ仲を直すならハ某わ直りたいわいやい　ベ　夫ハ誠か　マ　誠ちや　ベ　一丈か　マ　何の偽りを言ふそ　ベ　やれ〳〵嬉しや　かり初なから是ハ目出度事ちや　このよふな時はいさとつと和歌を上ケて帰るまいか　マ　一段とよかろう上ケさしませ　謡　ベ　思へハ無用の死に成りと　両人　〳〵二人りの者ハ仲直り去るニてもかしこき長生しろうと手に手を取りてわか宿へ犬死せてそ帰りける〳〵　ベ　ヤイ〳〵　マ　何ちや　ベ　そちと某ハ五百八十年　ベ　七ナ廻り　ベ　何事もあるまいちやつと来い〳〵　マ　心得た〳〵

悪坊

僧　ベ　是ハ西近江の者て御さる　今朝東近江へ斎に参り只今帰るさて御さる　先急て参ふ　誠ニ旦那多い中に今日参た御方のよふなしんしんな人ハ御さらぬ　夫故愚僧も大切に致ス事ちや　扨今朝雨かふり出したニ依て傘を持て参り

たれとも殊の外よい天気ニなつた事ちや　シテサンサヲ誘い出ル　一ノ松ニテアトヲ呼カケル　のふ〳〵御坊　ハア愚僧の事て御さり升か　如何ニもお主の事ちや　とれからとれへお行やある　夫ハ幸ちや同道せう　ハア私わ西近江の者て御さるか今朝東近江へお斎ニ参り只今帰る処て御さり升ス　夫ハ幸ちや同道せう　ハア其方ハ御さむらい私わ出家の事て御さる二依て御連ニハ似合ませぬ　お先へ御さつて被下　イヤ〳〵出家遠ひ似合たつれちや　是悲とも同道せう　ハア左様ならハ兎も角もて御さる　サア〳〵お行きやれ　先ツ御出被成ませ　はて御行きやれと言ふニ　ハア左様ならハ御ゆるされて被下　扨御坊ハ西近江か東近江に成たちやの　イヤ左様てハ御さりませぬ今朝東近江へお斎に参り只今帰るさて御さる　夫ハ兎もあれ御坊にちとふしんかある　夫ハ如何様な事て御さり升　此長刀をこうかまへたかはやからふか只し又こふかまへたかはやからふかもつて参ふ　ハア出家の事て御されハ何と有ふも存ませぬ　フウ知らぬと言ふハおそいと言ふ事か　おそいか早いか　御あふのふ御さり升　カラカサニテ　カタヒサツキ留ル　是りや御坊ハ手しやと見へた　其傘て請たとて身共か何と思ふ物ちや　又切ル　切れるか切れぬか平ニ持て参ふ　コロフ　ホおあふのふ御さり升　イヤ御坊ちと手を引ておくりやれ　ハア心得ました　手ヲ引　ヲコス　エイ〳〵さあ〳〵来さしませ　ハア　何に御坊は最前何とやらおしやつたの　ハア　西近江か東近江に成たちやの　イヤ左様てハ御さりませぬ　西近江の者て御さる　今朝東近江へ参り只今帰るさて御さる　夫ハともあれ幸ひ是に茶屋かある　御坊に一飯のおませう　おとおりやれ　是ハ御ゆるされませ　はて御通りやれと言ふニ　ハア心得ました　亭主〳〵〳〵　ハア引何と御さり升　旅の出家を同道した　一飯の拵へ　心得ました　早うこしらゑ　畏て御さる　御坊〳〵　ハア　お主ハ此長刀かこわいか　左様て御さる　こわくハ是ニ立て置ふ　よふ御さり升ふ　日付　柱ニムカイ長刀　タテカケル　柱かちら〳〵してたゝぬ　したに置ふ　よふ御さりませう　ア、酔たり〳〵　殊外草臥た　こりや御坊ちと是へ寄て腰を打ておくりやれ　心得ましたこゝらて御さり升か　イヤ〳〵最そつと上みを打ておくりやれ

僧　ハア此辺りて御さり升か　ベ　最そつと下ちや　僧　此辺りて御さり升か（色ミシカ〳〵アリ）——只シ此当りて御さり升か　ベ　是りや何とする　僧　ハアねむりました　御ゆるされませ　ベ　了けんせまいと思へとも出家の事ちや了けんのする寝むらぬ様ニ腰を打ておくりやれ　僧　心得ました　此当りて御さり升か　ベ　イヤ〳〵下を打ておくりやれ　僧　ハア此辺りて御さり升か（色ミシカ〳〵）只シ此当りて御さり升か（シテ寝入坊主サシアシニテハシカ、リエ行亭主ニムカイテ）のふ〳〵茶屋殿　茶　何と御さる　僧　あれハ何と申人て御さる　茶　あの人を知らせられぬか　僧　何をも存ませぬ　茶　あの人ハ六角堂の悪坊と言ふてあの人に逢ふてけかをせぬ者ハ御さらぬ　其方はけかわさせられなんたか　僧　され共けかわ致なんな（ママ）何卒愚僧ハ裏道からいなして被下　茶　ヤアのふ〳〵　僧　ハア　茶　其方をいなしてハ某か迷惑をする　其上一飯も出来た程に先あれへ居てお居やれ　僧　左様てハ御さらうか出家の事て御さる程に御せうニも成りませう何卒いなして被下　茶　左様ならハ兎も角もて御さる　僧　夫ハ忝ふ御さる左右あらハもふこう参る　茶　お行きやるか　僧　ハア引のふ〳〵嬉しや〳〵まつ急て参ふか　思へハ〳〵腹の立ツ事ちや　何とした物て有ふそ　イヤ思ひ付た致よふかある（サシアシシテソハエ行長刀少刀ヒケトル傘ショロウ衣ヲヲリ）　是〳〵是てよい　ヤイ悪坊己最前某をなふたかよいか是かよいか　己おきて見よ　おくる処を此長刀のはにのせてくりよふ物をナアはつちやこわ物先ツ急て参ふ　ベ　ウンよふ寝た事かな〳〵誰そ湯か茶か呉い是は如何な事　宿かと思ふたれハまた茶屋ニ寝て居た程に扨も〳〵生たいもない事ちや□（虫）ミヲミ南無三宝是りや何者やら身共の大事のひけをそつた　扨ミとうよくな事をしおつた先某わ宿をずる時小袖をつほおり刀を差し長刀をかたけて出たか其様な物と言ふハ是りや何ちや　衣か有る傘も有ハ　こりや何ちや扨ミこひた物か有る　是ハ先何と言ふ物ちや知らぬヱミイ今合点した是ハせん宗坊主かとかまゑて座せんくふしをする女郎とやら言ふ物ちや　是か爰に有ふ筈ハないか是は先何とした事ちや知らぬ　エミ今とくと合点した　最前夢うつゝのよふニ覚ゆるハ出家壹人道道した　定メてしやかかたる磨のへんけて某を仏道江引いれらるゝと見へた　此後ハ悪心のふつとやめ念仏修行ニ出よふと存る　扨も〳〵是悲もない事ちや　乍去（ト言テ衣ヲキル）　思ひよらすのとんせいや〳〵小袖に替へた此衣刀ニかへた此女郎長刀に替へた傘をかたけてし

ゆたにいしようよ〳〵　あんやの僧にはちハ御座らぬかはつち〳〵

シテ　エン尾　ヒケ　唐織ツホヲリ　少刀
半クミリ　長刀カツク

僧　角頭巾　衣　傘　カツク
シヨロウカイチウスル

茶屋　長上下

鎌腹

女　のふ腹(ママ)や〳〵　シ　誰もないか　取りさへて被下〳〵　ア　何事ちや〳〵先待しませ　女　扨〳〵腹の立事て御さる　のかせられい　仕よふか御さる　ア　先御待やれ　是は先何とした事ちや　女　此方も聞て被下内にハ雨かもるやら水か付やら片時も内にわ居られませぬ　うろたへて内に居るニ依て山江行ケと言へは行ませぬのかせられい仕様か御さる　ア　ハテ扨其様ニわゝ敷うおしやるな　某か山江行と言ふ程に先お待やれ　女　そうあらハ山江行ケと言ふて被下　ア　心得たヤイ太郎　是ハ先何とした事ちや　シ　よい処へ出て被下たア　よい所とてハ有まい　又しても〳〵此様においはしらかされて何とする　シ　扨ミ腹の立事て御さる　わらをたばねても男ハ男て御さる　夫ニ又しても〳〵おひはしらかすニ依てけふハ腹を切ふか翌は身をなけよふかと腹をさすつて一日〳〵と堪忍して居升　ア　ハテいらぬ事をいわす共なせ山へ行かぬそ　シ　成程山江行まいてハ御さらぬか朝おき上るかいなや降あるきをしてまだろく〳〵ニ支度さへしませぬ　女　ヤイワ男　シ　何ちや　女　朝くらふた物をわすれおつたか　ア　ハテお主ハわミしい人ちや　先身共にまかして置かしませ　ヤイ〳〵

太郎早ふ山江行かぬか　ヘ山へ行まいてハ御座らぬ　おれも急度分別を致しました　アノ鎌とおうこを取て被下
ヘすれハ山へ行か　ヘ先山江行と言ふて取て被下　ヘ心得た　のふ〳〵太郎ハ山江行と言ふ程に其鎌と
おふこをおくせと言ふ　ヘ山江さへ行ケハよふ御さる　早う行ケと言ふて被下　ヘ心得たさあ〳〵是を持て
早う山江行ケ　ヘおくさせられい　ヘ何とする　ヘなんとすると言ふ事か御座らうか　仏の顔も三度な
すれハ腹かたつとやら言升　己今に思ひしらせうそ　ヘヤイ〳〵是ハ先何とする　ヘ何とすると言ふ事かう
ろたへた事か御座らふか　今ニ腹十文字にかき切てきやつに悔ませまするわいの　ヘヤイ〳〵其様な事ハせぬ物ち
や　ヘのふ腹立や〳〵　己夫ならハ腹を切て見よ　ヘ今の間に腹十文字にかき切て腹わたを己か顔へ打つけ
てやらうそ　ヘ己かよふなみれんな奴かなんと腹か切らるゝ事か成物ちや　男ならハ切て見よ　ヘおれかい
つみれんな事か有た　ヘ山江往て子供ニさへやまされてうするてハないか　ヘ己か居る所てやまされた事ハ
ないゝやい　ヘいらぬ事をいわすとも早う山へ行ケ　ヘかまわせらるゝな　此方か居させらるゝニ依て口斗
りかいこひ事を言升　人そわへをしまする程に此方ハ先こちへ御されいの　ヘても是か何と見捨て行かるゝ物ち
や　ヘはて気遣ひさせらるゝな腹を切る事てハない程に先こされいの　ヘヤイ〳〵女共腹を切るそよ
ヘ己男ならハ切て見よ　ヘはて扨其様なわゝ敷い事をおしやるな　ヘさあ〳〵早ふこちへ御されいの
ヘ是か何と行かるゝ物ちや先お待ちやれ　ヘ左右いわす共こちへ御されいの　ヘヤイ〳〵女共　今に後
悔しよふそ　今腹を切そよ　ヘヤイ〳〵りよふ事な事をするなよ　ヘ其様な事をいわすとも早ふ御されいの
ヘはて先爰をおはなしやれの　ヘ何のはなしませう　先こちへこされいの　ヘ己今の間に腹十文字に
かき切て見せうそ　ヘ其方か是に御座るニ依てあの様な事を言ゝ升　早ふ御されいの　ヘヤアゝのふ〳〵誰
殿　先ちよつと御されいの　女共〳〵是は如何な事こりやへん事もせぬ　又誰殿も誰殿ちや　其方の取あつかいを聞
まいてハ御さらぬ　のふ〳〵誰殿是も物ヲいわぬハ扨も〳〵きこへぬ人ちや　アノ人の取りあつかいてついにらちの
明た事かない　扨も〳〵にか〳〵敗い事ちや　と言ふても仕様かない腹を切らうまてよ　先腹を切にわ聞た事か有る

弓手へ打たてゝ馬手へ引廻すよふニ聞た　扨〳〵むそうさな事ちや　先腹ヲよふもみやわらげていこう是りやつかへて有る　爰へ鎌をうち立てたらハ胸の虫か定メておとろくて有ふ　大方よい鎌もよふたつて有り　さらハ切ふアイタ〳〵のふいたやの〳〵しぶ皮てもむけハせぬか知らぬ　イヤ〳〵されともけがもせぬやら血もたらぬ　中ミ切そうな事てハない　なんとしたらハよからふそ　イヤ是当りに鎌を立て置ふてあの高みからころびを打て切らふ　エイ〳〵〳〵のふおそろしや〳〵　すでに切らふとした　是ても埒か明そうな事てハない　何とした物て有ふそイヤあの大イ木ニ鎌をくミり付て是から走りがゞつてだき付たらハ何のくものふ腹か切れそうな物ちや　さらハ先アノ大イ木ニくミり付ふアゝ此気かとふから付ケハよかつた物を　さらハ此当りから走り懸つてヲミおそろしや〳〵既ニ腹を切らふとしたあふない事て有たアミ是ても中〳〵切られまい　兎角あの鎌を見るニ依てちや　此度ハ目をふさいて走り懸つてたき付ふ　是悲もない事ちや　腹ヲ切ると命かない此誰殿も〳〵ちや　腹を切ると言ふにいぬると言ふ事か有る物か　誰殿〳〵まつちよつと御座れいの　是りや返事もせぬハ　腹を切るそよヤイ〳〵所の者　けな者か鎌腹を切るを皆出て見物をして後の世の手本にせぬか早ふ出て見物をせぬか　扨ミおく病な者ちや　壹人も出ぬハ　ヤイ〳〵女とも今鎌腹ヲ切ると命かないか何も言置事ハないか　是〳〵又誰殿もこされいの　最前も言ふ通り是悲此方の取あつかいを聞かぬてハない　言ミたい事かある先鳥渡と御されいの　是ハ如何な事　返事もせぬ　最早思ひ切て腹切らふ　此辺りから目をふさいてそりや今腹を切るそや　腹を切るぞのふおそろしや〳〵既にけかをしよふとした程にの中〳〵是ても切るゝ事てハあるまい　なんと仕様ふそ　イヤ某のこゝろを直して山へさへ行ケハさつと済む事ちや　是悲切らいて叶ぬ時は大勢の人の居る前て切らふ兎角此度ハ思ひ留ふ　イロ　爰を見れ共人もなしかしこを見れ共人も無しよく〳〵物を案するに　調あつたら命捨んより鎌とおふこを打かたけいさ芝かりに行ふよ〳〵　ヤイ〳〵山から戻るハ菊千代てはないか　女共へ言伝か有る　太郎か機嫌を直して山へ行程にせんそくの湯をわかしておいて呉れいと言ふておくりやれ　何に言ふてくりよう　扨ミそちハけな者ちや　里て逢ふそ〳〵

太郎シテ〈是ハ此辺りに住居する太郎と申す鉢たゝきて御さる　某家ますしいニ依て所の住居もならぬよふニなつて御さる程に他国を致し余の商売を致そふと存る　又松の尾の明神ハ氏の神て御座るニ依て是迄のお礼御暇乞の為参らと存る　誠ニ住なれた所をはなるゝと申ハ無念な事て御され共何共致よふも御さらぬ事ちやイヤ何角言ふ内に是ちや先おかもうハア私只今参るは別の事ても御座らぬ　家ますしいニ依て他国を致し余の商売を致そふと存るニ依て是迄の御礼御暇乞の為ニ参詣致ました　松の尾の明神〳〵今宵ハ是に通夜を致そうと存る　ヒサリスシネル　末社アト〈抑是は松の尾の明神の末社瓢の神とは我事成り　爰に太郎と申鉢たゝきか御さる　家まつしいニ依て他国を致よの商売致との事ちや　又他国をし余の商売を致すならハ弥家ますしからす只今迄の通り鉢にたゝきを弥けんこに勤るならハ福貴に守てとらせうとの御事ちや　先あれへ参り此事を申聞せはやと存る　扨太郎ハとれにいる事ちや知らぬイヤあれに通夜をして居る　如何太郎儘ニ聞け　汝他国をし余の商売を致ならハ弥家ますしからす又只今迄の通り鉢たゝきを弥けんこに勤るならハ富貴に守てとらせうとの事ちや　則瓢衣を被下るゝ間其分心得候へ〳〵　シテ〈ハア〳〵〳〵ハア引　あらありかたや松の尾の明神〳〵扨〳〵あらた成る御霊夢を蒙た　某他国をし余の商売をするならハ弥家ますしからふす又只今の通り鉢たゝきを勤るならハ富貴にしてとらせうとの御事ちや　則瓢衣を被下、との御霊夢ちや　先此衣を着よふと存る　太郎笛座へ入ル〈のふ〳〵何れも御さるか　〈是におり升〳〵〳〵〳〵〳〵　〈承れハ太郎か鉢たゝきを止メて他国をし余の商売を致スと申て明神へお暇乞に参つたと申何と申合せてとめに参り升まいか　〈是ハ一段とよふ御さらふ　〈そうあらハさあ〳〵御され〳〵　〈心得ました　〈誠ニ是程の事を某共に申さぬと申ハ聞へぬ事て御さる　〈其通りて御さる　〈其上祖師上人のおきてをそむくと言ふ物て御さる　〈言せらるゝ通りて御さる　〈イヤ何角言ふ内に御前て御さる　〈誠ニ御前て御さる　〈太

郎ハとれニ居る尋て見升まいか　一段とよふ御さらふ　のふ〳〵嬉しや〳〵　急て帰らふ　太郎〳〵〳〵〳〵エイ太郎　エイいつれもとれへ行かし升　其方ハ鉢たゝきをやめて他国をし余の商売をすると言ふて明神へ御暇乞にお行きやつたと聞たニ依て皆申合せて留メに来ました　夫ハよふこそ留に来ておくりやつたれ　夫ニ付てあらた成る御霊夢を蒙た　夫ハ如何様な事ちや　別の事てもない　他国をし余の商売をするならハ弥家ますしからふす　又是迄の通り鉢たゝきを勤るならハ富貴ニしてとらせうとの御事て則瓢衣を被下たか何と難有御霊夢てハ無いか　扨ミそれハあらた成る事ておりやる　左右あらハ此後ハ念仏けんこに勤さしませ　成程此後ハ念仏けんこに勤て御さろう　夫かよふ御さらふ　扨いつれも幸ひ御出やつた事なれハ明神へ御礼に念仏を始めうと存るか何と御さらふそ　是ハ一段とよふ御さらふ　左右あらハ其用意ヲさしませ　心得たミナ〳〵大小ノ前ニナラフシテ水衣ノツユヲトル立頭茶せんヲヲキカネ持タ、ク　心得ました各正面ヘ出テシテワキ座ノ方カネ打目付柱ノ方ソレヨリ段ゝイリチカイニナラフ　用意ハよふ御さるか　能キ光りそとふ御さる　よくハあれへ出さしませ　よのふ光りそとたのむ茶のきよの仏のきよひヨんみてらたつふねきよひよん合つの里に六ツの国ありきよひよん瓢ふくよん　イヤア四王寺の風のさむきさにありていとうをうつちならす三衣を家と走りめくる鉢たゝきかせい〳〵かくに懸て後生を願わゝなとか仏にならさらんきよひよん　のふ五郎三郎　田舎へお下り有ふするニハふくへ成共おいて行ケ小ふくへい成とも置て行ケ夫ハや女郎安き間たの事なれハ諸国をや女郎てんすくてんとたゝこふするにハふくへのふてハおせうしィ　よしや君たんた　寝てもさめてもわするなよ只一念な念仏なりけり思へはうき世は夢の世をそかつし栄花ハ是皆春の花めうりの心とゞむへつし　それ一代のしやか如来の仏法にハ現こん名こん法道はん若法花ねはんほうそふりつしうなんとゝいへるこむつかしい事とも我らかよふ成くちむちとん成者ハ思ひもよらす　あなたの角とてハひよん　こなたの門てハたん　たん〳〵からりころりとうつちたゝいて願ふ後生ハ茶せんめせ〳〵仏法あれハせ法有り　ほんのふ有れハほたい有り　柳わみとり花はくれないの色〳〵なれハ急て浄土をねこふへつし　なもうた　はるひた

〈はつはいとう茶せん

太郎　祖父着付　カミハシギ　着ナカシ　後水衣　瓢持テ

僧　むしのしめ　衣　角頭巾　初メ茶せん持　後カネ持

次　懸素袍下クミル茶せん持ツ

同　十徳鳴下クミル同断

同　狂言上下鳴クミル同断

同　モキトウ下クミル同断

同

同

末社　着付水衣　末社頭巾下クミル　瓢水衣　持チ出ル

弓矢太郎

〈是ハ此辺りの者て御さる　某天神講の当(トウ)に当た　各へ人を遣ふと存る　太郎官者あるか　〈ハア引

〈イタカ　〈御前に　〈汝呼出ス別の事てない　某天神講の頭に当た　汝は太儀なから各へ往て最早時分もよふ御座るニ依て御出被成るゝ様にと申て来い　〈畏て御さる　〈急て往てやかて戻れ　〈ハア

〈エイ　〈ハア引　扨〳〵ケ急な御用を被仰付た　扨殿方へ参ふそ　イヤ誰殿の方へ参ふ　誠ニ頼ふた人か頭を勘られたハ近ひ事の様ニ存たに又頭に当らせられた事ちや　イヤ何角言ふ内に是ちや　案内コウ　ハシカミリムキ　物申案内申一ノ松へ出テ　〈イヤ表に案内かある案内ハ誰そ　〈私て御さる　〈エイ太郎官者何と思ふて来た　〈

今日参る別の事ても御さらぬ　頼ふた者使におこされました　〳〵夫ハ何と言ふておこされた　〳〵もはや天神講の時分もよふ御さるニ依て御出被成て被下るゝ様ニと申てお越されました　〳〵やれ〳〵夫ハよふこそ言ふて御人を遣されたれ幸ひ何れも是へ寄て御さる追付同道して参ふと云ふて呉い　〳〵夫ハ幸て御さる　私も足を助かつたと言ふ物て御さる　左右あらハ追付御出被成て被下　ヲミ追付行てあらふ　〳〵左様ならハもうこふ参り升

〳〵最早行か　〳〵ハア　〳〵よふ来た　〳〵ハアのふ〳〵嬉しや〳〵何と有ふと存たに御内に御出被成殿方も御寄被成て有るとの事ちや　此様な幸の事ハ御さらぬ　イヤ何角と言ふ内に戻た　先此由申上ふ　ハア申上升

〳〵何戻たか　〳〵只今帰りましたか誰殿へ参て御されハはや何れも御寄被成て御座て追付是へ御出被成るゝとの事て御さる　〳〵夫ハ一段ちや御出被成たらハこう御通し申せ　〳〵畏て御さる　〳〵のふ〳〵いつれも御さるか　〳〵是ニおります〳〵〳〵〳〵　只今誰殿から天神講を勧る程に参るよふニと申て呼に参りましたイサ参り升まいか　〳〵一段とよふ御さろう〳〵〳〵〳〵　〳〵さあ〳〵御され　〳〵心得ました〳〵〳〵〳〵誠ニ何と思はせらるゝ　かよふニ息才て天神講に参ると申ハ目出度事て御さるのふ　〳〵言せらるゝ通り何れも息才て寄合と申ハ定メて天神のかこてかな御座ろう　〳〵其通りて御さる　〳〵イヤ何角言ふ内に参りました　〳〵いか様是て御さる　〳〵先案内をこわせられい　〳〵心得ました　物申案内申　〳〵イヤ表ニ案内か有る案内ハ誰そ　〳〵太郎官者来たそ　〳〵某も来たそ　〳〵来たそ〳〵〳〵　〳〵先御出被成ました通り申ませう程に先夫ニお待被成ませた　〳〵左様て御さる　〳〵心得た〳〵　〳〵ハア申上升　何れも様の御出て御座る　〳〵何いつれも見へた　〳〵心得た　御当目出度御さる　〳〵こう御通り被成いと言へ　〳〵畏て御さる　こふ御通り被成いと申され升　〳〵シカ〳〵　〳〵是ハ何れも御苦労ニ存升ス　御人を被下すとも参ふに　〳〵御念の入た事て御さる　〳〵扨太郎殿か見へませぬか何とした事て御さる　〳〵只今誘引ましたか今日ハ狩りに出られて留主て御さつた　〳〵其通り聞ました　〳〵シカ〳〵あの人ハ毎度狩りに出られ升か見事何そ持てる（持ら）ゝ事て御座るかの　〳〵あのよふニ弓矢を持てありくは臆病者故人おとしちやと申升　〳〵如何ニも其様

ニ聞きました　〈何と思わせらるゝ今日太郎か見へたらハ何そおそろ敷い咄をして太郎をおとし升まいか
〈一段とよふ御さらう　〈先是へ寄て御され　〈心得ました　〈是ハ此当りに住居する太郎と申者
て御さる　爰に誰殿と申人か天神講の頭に当られた　此方へ参ふと存る　先急て参ふ　誠ニ前広から知らされそふな
物を今日ニ成て知らするハなおさりな事て御さる　イヤ是ちや　物申案内申　〈イヤ表に案内か有る　案内ハ誰
そ　某ておりやる　〈エイよふ御出被成ました　〈某か来た通りをおしやれ　〈畏て御さる　ハア申上
升　太郎殿か見へました　〈こふ御通り被成いと言へ　〈畏て御さる　のふ〳〵太郎か見へました　何ニ太
郎かミへましたか　こふ御通り被成いと申されます　心得た御当目出度ふ御座る　何れも出させられたか　〈最
前御宅へ寄りましたれハ今日は狩りに出させられたと承り夫故御先へ参りました　〈扨〳〵　〈忝ふ御さる
いつ迚も花〳〵敷御出立て御さる　〈されはの事て御さる　今日ハ狩りに参り承れハ天神講を御勤被成る、早や
いつれも出させられたと申程に狩りの儘て参りました　今日も何そ得させられたか　〈如何ニも今日ハ上野山へ
参りまして何をかなと存所に手負と見へて大キイ猪かかけて参るを何かこの弓矢てこさる　よつひきひようと放まし
たれハ猪の胴腹をつきぬいていはらくろへ射付ましたか何と見事てハ御さらふかの　〈扨ミ御とろき入た事て御
さる　〈のふ太郎殿此方は狐ても射させらるゝか　〈狐ても狸狼兎なとてものかす物てハ御さらぬ　〈
狐と言ふ物ハ人に化ケ升そや　〈いか様人に化ケます　〈何の狐か化る物て御さらふそ　〈イヤ〳〵狐
ハ人に化ケ升　昔鳥羽の院の御時玉藻の前と申て上エ童か御座有し　〈上え童とは何の事て御さる　〈大内
の女の事て御さる此玉藻の前と申ハ根本狐て御さる　或ル時内裏に七日の御歌合の有て後御ほう官の有しに大風吹て
御殿の灯火壹度に消へました　〈是は如何な事　何れも如何と御さわきの時彼の玉藻の前の身より金色の光りを
放ちて清涼殿の照シました　〈扨ミ気味のわるい事て御さる　〈俄ニ光りかゝやき御庭の真砂の数まても限
りのふ見へて昼の様に有つたと申か何と狐と言ふ物はおそろ敷い物てハ御座らぬか　〈言せらるゝ通りおそろ敷
い物て御座る　〈是〳〵何の狐かそのよふな事をする物て御座らふ　それハうそて御座る　〈何の空言て御

さらう　今宵の座敷にもこう並ンた内に狐や狸か人に化ケて居るも知れませぬ　扨〳〵りやうしな事をいわせらるゝ　誰殿〳〵〳〵〳〵皆〳〵知れた顔て御さる　何に其よふな事か有る物て御さらふ　今宵ハ何とやら灯火か青ふ黒うて気味のわるい夜て御さる　誠ニ気味のわるい夜て御さる　イヤ某ハ所を替へませう　さあ〳〵連歌を初めさせられい　今宵は連歌を取置ていつれもおそろしい咄をしませう　是はよふ御座らう〳〵何のおそろしい咄より面白連歌をさせられい　此中某わ北野へ参詣致た　ようこうの松の上から釣瓶おろしと言ふ化物か出まする　夫ハとのよふな物て御さる　是〳〵其様な咄しをさせらるゝな　太郎殿ニハおそろ敷い咄ハきら(ママ)て御さるか　イヤ〳〵きらいてハ御さらぬ　して其化物か何としました　先雨ハしよほ〳〵ふり升　気味のわるい事ちやと思ひ〳〵通りました　何ちやと存たれハのふ女の首て御座た　髪を取乱シけら〳〵と笑ふて青い色の火を吹かけましたか恐敷物てハ御座らぬか　扨〳〵恐敷事て御さるのふ　気味のわるい事て御さる　何の恐敷事か御さらう　さあ〳〵連歌を初メさせられい　某ハ此中丑の時もふてを致すか右近の馬場にハ恐敷い物かおり升　夫ハ何て御さる　先参ると夜ハ更け人しつまつて松のかけよりなまぐさい風か吹てますと松の枝かめり〳〵〳〵とおるゝ音(おと)か致た　是ハ如何な事　扨〳〵気味のわるい事ちやと思ふて通りましたれハ大キな鬼か出て角ハ三ヶ月眼ハ日月口ハ耳せゝ迄切れて牙をぬき出し大キな毛のはへた手をぬつと出しました（ト云テ太郎ノ前ヘ手ヲ出ス太郎目を廻スコケル各笑テ此様ニしてハおかれまいなと言テ呼出ス）　太郎〳〵〳〵〳〵（ヨウ〳〵気カ付ヲキル各笑）　扨〳〵臆病な人ちや　臆病なとハたのちや　ぬからぬ口を言ふ人ちや　何れもらちの明ぬ人ちや　何の目を廻そうそ　噺か面白さにしつと聞て寝入て御切やらぬそ　某ならハ弓矢をもつテ射留てくりやう物を扨ミ残り多い事をした　其方のけなけそふにおしやるか其様な物を見たらハ目の玉かひつくりかへるて有う（各笑）　其様に笑ハせらるゝか某か右近の馬場へ往て見て来たらハ何とする　何其方か見に行事か成る者か　左右あらハ今宵某右近の馬場へ往て見てこふ程に何そ印をおこせ　是ハ尤ちや　夫ならハ此扇をやる程に松の枝に懸てお来やれ　是を懸て化物を見届けた

ら ハ各を某のふたいにするか合点か　いかにもならう　〈若シ又得懸すハ各の手下にするか合点か　〈如何にも心得た　左右あらハ身共は行そ　〈急てお行ややれ　〈きやつハきのはやい者て御さる程に若シ人をたのふて扇をかけてもろうまい　〈こゝろへた〈（イキヲコンテ日ノ丸ノ扇ヲヒラキ入ル）　〈入（中入）　とつと往た　〈其通りて御さる　〈太義なからこなた御さつて被下　〈一段とよふ御さら物ても御さらぬ　誰そ見に行かすハ成り升まいか　〈物すこや〈殊ふ（皆〈中入）　扨も〈物すこや〈　是はしん〈とする　誠ニ我ガのつよいはいらぬ事て御さる　此よふな物すこい夜ニも言ミ懸た事なれハ参らねハならぬ事ちや　イヤ大方此当りに扇を懸たらハよからふ　乍去某の参るを心元のふ言て居た　何れ誰そ見に来るてあらふ　参いつたらハおとしてやらふと存る　先是へ依て居よふ（笛座ヱ入ル）　物すこや〈殊の外しつまつた夜ちや　此太郎ハ見事いた事て御さるか心元ない事ちや　定メて此形りを見たらハ嗤そ肝をつぶすてあらふ　〈イヤ何者やら参つたそふな（シテタツテ舞座ノ真中ニテ両人見合ヲトロキ目を廻スタヲレルシテ漸気カツキヲキテ面ヲヌキ持テ）　〈扨も〈恐敗い事かなまんまと鬼か出た先急て帰ふ（ハシカミリムイテ）　ヤア何やらおひたゝしう火か見ゆる　合点の行ぬ事ちや　先是へ寄て居よふ（後見サエツク）　のふ〈何れも御さるか　〈是ニおり升〈〈　此誰殿ハ何として御さるやら今に帰られませぬ　其通りて御さる　〈申合せて通りイサ参り升まいか　〈よう御座らう　〈さあ〈御され〈〈心得ました〈〈　扨ミくらい夜て御さる　〈中〈くらふて道か分りませぬ此たい松かなくは一足も行かれ升まい　〈其通りて御さる　〈イヤ是に何物やら居まする　〈とれ〈是ハこひた形りて御さる　〈心得ましたヤア是ハ誰殿て御さる　誠ニ誰殿（ママ）て御さるイサ呼せられい　〈誰殿か先其面をとらせられい　〈是ハ先何とした事て御さる　〈のふ聞かしませ　太郎か参つたらハおとしてやら〈〈〈〈（各呼フキカツク）　うと思ふて此出立に成て参たれハのふおかせられい太郎は来いて誠の鬼か出て最前の嘶のよふニ大イ角かはへて眼ハ日月の如く口は耳せゝ迄切れてきはをむき出しとんてかゝるを（此咄ノ内ニシテ立テキミウナツキ面キテ）　とつてかもふ〈　〈そりや出たハ　〈とつてかもふ〈　〈アゝゆるして呉れい〈（各ニケ入追廻シ如常）

太郎　士烏帽子　黐素袍　弓矢持　後赤頭武悪面　唐織ツホヲリ下クミル　杖持

主　長上下　後シテ同断

立衆　長上下　後モミダチトルタイマツ持

太郎官者　如常

福の神

一アト　是は此辺りの者て御さる　今日ハ大晦日て御さる　例年の通り大社へ参ふと存る　夫ニ付て毎も同道致す御方か御さる　是を誘引て参ふと存る——　誠ニ毎年〳〵不相替息才て参詣致すと言ふハ何より目出度い事ちや　イヤ何角言ふ内に是ちや　物申案内申　二アト　イヤ表に案内か有る案内ハ誰そ　一　某て御さる　二　エイ誰殿今日ハ何と思ふての御出て御さる　一　先は目出度年の暮てハ御さらぬか　二　言わせらるゝ通り目出度歳暮て御さる　一　夫ニ付て毎年嘉例て大社へ年を取りニ参る　毎も御同道申に依て今日も誘引ニ寄ました　二　ヤレ〳〵それハよふこそ誘引わせられたれいかニも御同道申ませう左右あらハいさござれ　一　何か扨先御されわせらるゝ　一　身共から参ふか　二　一段と能ふ御さらふ　一　サア〳〵御され　二　心得ました　一　誠ニ何と思て御さる　一　去年参たを頃日の様に存たにはや一トとせ立た事て御さる　二　いわせらるゝ通り月日の立ハ早い物升　あれへ参り升まいか　二　イヤ何角言ふ内に大社へ参りました　二　左様て御さる　一　毎も福の神の御前へて年を取り　二　一段と能ふ御さらふ　小廻り　一　此辺りへ参つたらハいかう賑敷う事て御さる

一　誠ニおひたゝ敬い参詣て御さる　一　イヤ何かと言ふ内に御前へて御さる　さあ〳〵御かませられい
二　心得ました　壱　最早豆をはやす時分て御さる　其用意をさせられい
福ハ内〳〵　二　福ハ内〳〵　一　福ハ内〳〵〳〵（カハリ〳〵言ナリシテ出一ノ松ヘ出ル）　二（シテ）　心得ました（両人大小ノ前ヘクツロク扇ヒロケ持出ル）　一　夫へ御出被成
たわ殿方て御さる　シ　日比汝らかしんこうする福の神にてあるそとよ　二人　笑〳〵〳〵　一　ハア―先斯ふ御来りん成りませ
シ　心得た（真中エ行アト二人入リ遠ひヲモアトワキサナリ）―扨福の神是迄出たになせ神酒をくれぬそ　シ　汝はたのしう成りたいか　一　是ハわすれました　のふ〳〵神
酒を上ケさしませ　二　心得ました（神酒後見サヘ取ニ行扇開キ持出ル）　シ　とれ〳〵ヲヽ有るそ〳〵只今汝らか捧る神酒ハ福の神かたふるてす　一　何卒富貴に成りと
ふ存升　二　神酒て御さる　シ　夫ハ何事ちや　一　日本の大神小神ハ聞へましたか別ては松の尾の明神と事を分け　一　ち
と申上たい事か御さる　シ　夫ハ何事ちや　一　いつれ何とした事て御さる　シ　ふしん尤ちや　松の尾の明神ハ日本の
て被仰るゝハ何とした事て御さる　一　日本の大神小神ハ聞へましたか別ては松の尾の明神と事を分け　一　ち
酒神ちやニ依て此神の召上られぬうちハ余の神〳〵の召上る事かならぬニ依ての事ちや　一　是は御尤て御さる
シ　扨汝も富貴ニ成りたいか　一　何卒たのしう成りとふ存升　一　たのしう成るニは持いて叶わぬ物か有
るか夫ハ持たか　一　夫は何て御さり升る　シ　金銀米銭ハ有るか　一　是ハ福の神の仰せ共覚へませぬ　さ
よふな物か御さらぬニ依てケ様にあゆみをはこふ事て御さる（二人）　シ　左右あらハ麦もあるまいナア　二人　左様て御
さり升る　シ　其様に何もなくてハ富貴になしにくれけれとも年月そち達かあゆみをはこふに依て富貴にしてとら
せうそ　二人　夫ハ難有ふ存升る　シ　一度に富貴にしてとらしたけれと又おとらうという事かある物ちや程にう
す紙を重ぬるよふに次第〳〵に富貴にしてとらせうそ　二人　夫ハありかたふぞんし升る　シ　今福の神の言置事
を両人共よふ聞け　二人　ハア引（舞ニカミリ諷）　シ　いて〳〵此ついてに〳〵　たのしう成よふ語りて聞せん　朝おきと
うして慈悲有るべし　女男の中に腹立へからす　人の来るをもいとふまし　我等かよふ成福てんニわ如何ニもふくを
結講して扨中しゆにわふる酒をいやと言ふ程盛ならハたのしうなさてハ叶ふまし　シ　笑〳〵〳〵　二　福ハ内
〳〵　二　〳〵　シ　ウワアハヽ　笑

シテ　福の神　頭巾　唐織ツホヲリ下ハカマ扇開持
但シハン切ニテモ

アト　アト二人　長上下

〃　入用　かつら桶

靱猿

シテ　かくれもない射手てす　此中ハ何方江も出ぬ　けふハ野江出て鳥をねらふて遊ふと存る　ヤイ〳〵居るかヤイ

太　ハア　シ　あるかア　太　ハア　シ　居たかやい　太　御前に　シ　汝呼出ス別の事てない　此中ハ何方江も出ぬ　けふハ野へ出て鳥をねらふて遊ふと思ふか何と有ふ　太　御意なくは申上ふと存ておりました是は一段とよふ御さりませう　シ　左右あらハすくに行ふ汝供をせい　太　畏て御さる　シ　さあ〳〵来い

太　ハア　シ　誠ニ何と思ふそ　世になくさみハ多　されとも鳥を射て遊ふ程面白ひ物はないナア　太　上へ〳〵様方のよいおなくさみて御さる　シ　けふハ物数を射て見せうそ　太　夫ハよふ御さりませう　狼引　是ハ　太　此辺りニ住居する猿引て御さる　毎年御馬屋祭りに旦那廻りを致ス　今日も参ふと存る　誠ニ毎年〳〵不相替息才て旦那廻りを致すと言ふハ目出度事ちや　シ　ヤイ〳〵太郎官者　太　ハア　シ　汝はあの猿を見たか　太　よふ御さいかにも見ました　シ　よい猿ちやナア　太　左様て御さり升　シ　猿引ニ言葉を懸きやう　太　よふ御さりませう　シ　ヤイ〳〵猿引　狼引　ハア引　シ　汝は猿引よナア　狼引　如何ニも猿引て御さる　シ　よい猿を御待ちやつたよ　狼引　シ　けつこうな御意て御さり升　シ　ヤイ〳〵太郎官者　太　ハア　シ　あの猿ハ人

近ひか人遠いか往てたすねて来い　太郎　畏て御さる　ヤアのふ〳〵　猿引　何て御さる　太郎　其猿ハ人近ひか只シ人遠いかと被仰る、　猿引　子かひて御さるニ依て随分人なれて居り升と申上ケて被下　太郎　心得たハア子飼て御さるニ依て随分人馴て居ると申升　ベ　何人馴て居るか　太郎　左様て御さる　ベ　ウン能い猿を御待ちやつたよ　猿　キヤ〳〵〳〵〳〵　猿引　シミ〳〵〳〵——是は如何な事　太郎　アミ是ハ先なんとした事ておりやる　猿引　ハア子飼て御座るニ依て人馴てハおり升れ共頼ふた御方のお出立におそれて取て出た物て御さらふと存て猿引殊外迷惑かると被仰て被下　太郎　心得たハア申上升　ベ　何事ちや　太郎　子飼て御さるニ依て随分人なれてハおり升れ共頼ふた御方の御出立におそれて取て出た物て御さらふと申て猿引殊外迷惑かり升　ベ　ちく生の事なれハそつともくるしうない　又猿引に初メて逢ふてなれ〳〵しいかちとむしんかあるか聞てくりよふかと言へ　太郎　畏て御座る　のふ〳〵畜生の事なれハそつともくるしうない　また其方に始メて逢ふて馴〳〵しいかちとむしんかある聞てくりやうかと被仰る、　猿引　身に叶ひました御用なれハ何成共承りませうと申上て被下　太郎　こゝろ得たハア身に叶いました御用ならハ何成共承りませうと申升　ベ　夫ハ過分な　猿引に逢ふて一礼をいはふ　太郎　よふ御さりませう　ベ　ヤイ〳〵猿引　猿引　ハア引　ベ　身か無心かあると言へハ聞てくりよふと有て満足致急度一礼申ておりやる　猿引　是は迷惑ニ存升　御用も被仰付ぬ内に御礼と御座つてハ迷惑に存升先御用を被仰付て被下　ベ　ヤイ太郎官者　太郎　ハア　ベ　無心といつハ別の事てない　内ミ此靱を毛靱にしたうハ思へ共似合敷皮かない　又あの猿は毛なみもよいニ依て靱にかけたい　猿の皮をかせいと言へ　太郎　畏て御さる　のふ〳〵無心といつハ別の事てない　内ミあの靱を毛靱にしとう思召され共似合敷皮か無い　又其猿は毛並もよいに依て靱に懸たい　猿の皮を借せいと被仰る、　猿引　御機嫌の如何と存ましたに頼ふた御方の御され事を被仰て猿引殊外悦ふと被仰て被下（中上て）　太郎　イヤ御され事てハないそや　猿引　先そう被仰て被下　太郎　心得た　ハア御機嫌の如何と存ましたにおされ事を被仰て猿引殊の外悦ふと申升　ベ　借たらハ返すまいと思ふか五年か三年懸たらハ跡はかへそうと言へ　太郎　畏て御さる　借たらハ返すまいと思ふか五年か三年かけたらハ跡は返そうと被仰る、　猿引　すれハ

御しん実て御さるか　太中〳〵　狼引ヤアのふ是れ此狼ハ生て居り升スそや　生た物の皮をはけハたちまち命か終り升　ヤイましよ此よふな所に居るニ依てちやサア〳〵行〳〵　太アミ是〳〵　狼引何て御さる　シ此方をいなしてハ某か迷惑をする　平に御請を申さしませ　狼引そふあらハならぬと言ふて被下　太心得たハア申上升　シ聞た扨は諸侍に一礼迄いわせ今更借まいと言事か此上ハ借共不借ともいやてもおふても借ると言へ　太畏て御さる　シヤイ〳〵　太ハア　シいぎに及ハミ目にものを見すとナア　太ハア引諸侍に一礼までいわせ今更借まいと言ふか此上ハ借共借す共いやてもおふても借ると被仰る、　狼引何ちやいやてもおふても借る　太中〳〵　狼引おれも似合に旦那を持たか其よふなむりな事ハいわぬ物て御さる　太い儀ニ及ハミ目に物を見すると被仰る、　狼引そりや誰か　頼ふた御方か　狼引笑頼ふた者か目に物を見せたらハさそこわかろうそ　太已ていと言ふか　狼引てひと言たら何とおしやる　シのけ〳〵〳〵狼引共に射て取るそ　両人ハアミ先お待被成ませ　シ待とは何と　太御請を申せ〳〵　狼引畏て御さる　シイミヤお畏りやるまい物を　太畏たと申升　シ何畏たあ　両人ハア引　シそふのふて叶わぬ事ちや急て出せと言へ　太畏て御さるさあ〳〵急てあれへ出さしませ　狼引ハア畏てハ御さり升か頼ふた御方のよふな大かり又をいさせられたらハ狼の皮にきつか付て御役に立升まい　爰に狼の一打と申てたち所に命の終る処か御さる　これはし打て差上ましようと被仰て被下　中上太こゝろへたハア頼ふた御方のよふな大かり又て射させられたらハ狼の皮にきつか付て御役にたち升まい　爰に狼の一ト打と申て立所ニ命の終る処か御さる是はし打て差上ふと申升ス　シ兎も角もして早ふ打て出せと言へ　太畏て御さる兎も角もして打て出せと被仰る、　狼引左様ならハ狼にせん妙かふくめとふ御さる　しはらくの間御暇を被下れいと被仰て被下　太心得た左様ならハ狼にせん妙かふくめとふ御さる　しはらくの間御暇を被下いと申升　シ夫を身共にとふ事か急て打て出せと言へ　太畏て御さる　それを身共にとふ事か急て打て出せと被仰る、　狼引心得ましたヤア太郎官者殿〳〵　太何ておりやる　狼引何とおわひハ成り升まいか　太くとい事をおしやる　狼引ハアヤイましよ汝ちく生なれ共よふ物を聞け　そちをち

いさい時よりかひそたて色〳〵芸能ふを教へ今又汝かかけて楽〳〵ととせいをおくるニ依て何ほうか大切に思ふともなああれあれに御座る御大名かそちか皮を借せかせぬにおいてハ某共に御せいはい被成るゝとの御事せに腹ハ替へられすふひんなからも今汝を打程にかならす〳〵草葉のかけても某をうらみとばし思ふてくれなよ　やいましよ今汝をうつそエイ　ナク　シ　猿を打いて何をほゆると言へ　太　畏て御さる猿を打いて何をほゆると被仰るゝ　猿引　此方も聞て被下此中上下に遣ふと存して猿に船のろを押まねを教へて御されハ畜生のあさましさわ今身か命のおわるも知らいて打杖をおつ取りて船のろをおす真似を致升ス是かそもやそもふびんて何と打たれましよふそ　此上ハ某共に御せいばい被成るゝと有ても猿を打事ハ成りませぬ〳〵ナク　太　ハア申上升　シ　聞た〳〵何と言ふそ此中上下ニ遣ふと思ふて猿に船のろを押真似を教へたらハ畜生のあさましさわ今命の終る事も知らす打杖をお取て舟のろを押真似をする　それかそもふびんて打れぬと言ふか　太　左様て御さる　シ　フウアヽあわれな事ちやナア　太　あわれな事て御さり升　シ　何と申命を御助けたらハ悦ふか　シ　助けたらハ悦ふか　何か扨私迄も生ミ世ミ身ニあまつて有難うそんします　太　命を御助ケ被成たらハさそ悦ふて御さりませう　シ　左右あらハ命を助ケたと云ふて悦はせい　太　畏て御さる　シ　早う悦ハせい〳〵　太　ハア引ヤアのふ〳〵命を御助ケ被成たそ　猿引　とふあつても猿を打事ハ成りませぬ〳〵　太　是〳〵猿の命を御助ケ被成たぞ〳〵　猿引　ヤア猿の命を御助ケ被成た　太　中〳〵　猿引　夫ハ誠か　太　誠ちや　猿引　一丈か　太　おんてもない事　猿引　やれ〳〵嬉しや〳〵ヤイ〳〵ましよそちか命を御たすけ被成たそさあ〳〵御礼を申せ〳〵　シ　ヤイ〳〵某にじぎをするハ　太　誠ニじぎを致升　猿引　是と申も太郎官者とのの御取なし故ちや　さあ〳〵太郎官者とのへも御礼を申せ〳〵　シ　ヤイ〳〵そちニもじぎをするハ　太　私ニもじぎを致升ス　猿引　のふ〳〵太郎官者との此御礼に猿を舞ひて御目にかけふと申被仰て被下　太　心得た　此御礼に猿を舞ひて御目にかけふと申升　シ　夫は一段ちや身共も報を取てゆるりと見物をせう　太　よふ御さりませう　シ　是へ寄て手伝てくれい　太　畏て御さる　猿引　扨ミ汝はあまの命をひらうた其替りに情を出してよふ舞へよ　小謡　猿か〳〵参りて御寿

みよふ御地行ま狼目出とふのふ仕るおとるか手元立廻りかたにこゝしをゆうり合せしつやかに舞たりける八ツのかつこをはらりと打ハ十二のかくもそろうたり夫おん楽の鈴の音は寄せくるなみニもたとへたり筑紫下りの西国舟ともに八町辺に八丁十六丁のろかひを立しもにん〳〵の宝の中にあやゝりよふらん金らんとんす舟りやう口は唐織門のかゝる目出度宝の中に火取るたんま水取る玉ひんたのおとりハ面白や〳〵　ハア、扨も目出度の秋つすや小金升ニて米はかる〳〵御庭に〳〵花か咲候花は白金みハ古金〳〵船の中ニハ何とおよるそ　狼引　むかふへ出て寝たり何ちや寝るかの　狼引　しつほりと寝て　ヲミしつほりと寝て　狼引　手を替へて寝て　夫〳〵手を替へて寝て　狼　キヤ〳〵〳〵〳〵　狼引　ハアミ―　とまをしき寝にかしヲ枕に〳〵よさの泊りハとこか泊りそをなはかしやくしかむろか泊りかあ〳〵いとゝ名のたつ秋風に誰そよ妻戸をきり〳〵す〳〵いとし殿子の御さるやら　狼引　廻らふ〳〵　何ちや廻るか　狼引　おうきう廻て　おうきう廻て　狼引　そこらてきりりと廻つて　ヲミきり〳〵と廻て　狼　キヤ〳〵〳〵〳〵　狼引　ハア、犬かほへ候四ツ辻に〳〵ひんたの横たの朝なゑをハアしよんほり〳〵と植た物の今来るよめ　此内大名狼むかひ合大名マネスル内ニカキカケル事有リ　かからふそよの腹立や松の葉こしに月見れハ　狼引　むこふへ出て月を見たり　何月を見るか　狼引　手を替て見て　ヲ、手を替て見て　狼　キヤ〳〵〳〵〳〵　狼引　ハアしはしくもりて又さゆる〳〵ひんたのおとりハ是迄そ〳〵一ノへいたて二のへいたて三に黒こましなのふとふれせんとふとのこそゆふけんなれ泊り〳〵を詠ツ、猶せんしうや万せいと俵を重てめん〳〵にたのしうなるこそ目出度けれ　イヤア

シテ　大名　なし打エホシ素袍　袴腰付　弓矢持

アト　太郎官者　如常

アト　狼引　羽織上ヲヒ半下へい腰ニ差シ　笠　羽織

シテニテモヨシ

猿　　かるさん面引縄

〈扨汝ハ猿の舞ふを見た事かあるか　〈在所て一度見ました　〈夫ハどの様なものちや　〈面白ひ事て御さる〔　〈左右もあらふ　〈某もあのよふな猿か一疋ほしひわひやい　〈お買なされませ　〈さりなからかきおるニ依てきみかわるい　〈なしめハかゝぬ物て御さる　〈ハア、なしめハかゝぬか

〈左様て御さる〕　〈ハアミそろ〳〵もふそふなそよ　〈左様て御さる　〈汝も〔あれへ出て〕見よ〔　〈かしこまつて御さる〕　〈ハアハアヤイ〳〵〔先ハきれいな出立ちやわひやい　〈左様て御さる〕

〈猿某ハはひ廻けりと思へハあれハ立て舞ふわいやい　〈左様て御さる　〈汝か在所て見たもあの通りか　〈左様て御さる　〈ヤイ〳〵此扇をやるといへ　〈畏て御さる　〈けふハ汝か取成て命をた介てよい慰をする事ちや　〈ハア　〈左様て御さる　〈某もあのよふな猿かほしいわいやい　お買なされませ　持て舞ふ　アトシカ〳〵左様て御さる　扨〳〵りこんな者ちやなあ　〈ア、ヤイ〳〵　〈ハア此某かやつた扇を　〈ヤイ〳〵此太力刀をやるといへ　〈この御太力御刀を下さるゝを□　〈なんちや寝るかのおゝ□しつほりと寝てきヤ〳〵〳〵　〈是ハ如何な事ヤイカきおつたわいやい笑——　〈ヤイ〳〵此小袖上下をやろふ　〈よふ御さりましよふ　サア〳〵はよふぬかせい〳〵　〈畏て御さる　〈是もやれ〳〵何ちや廻るかの大きふ廻ルシカ〳〵　〈是ハ如何な事ヤイ〳〵またかきおつたわいやい扨〳〵よふカきおる事ちや　まねキヤ〳〵〳〵笑　シカ〳〵——何ちや月を見るの——手をかへて〳〵キヤ〳〵〳〵〳〵　〈またく

わいた笑　こんとカきおるときかぬそ笑　キヤ〳〵〳〵はひる　大名まねする

末広

シテ　大かほふもの。天下泰平に治り目出度御代なれは〔上ミの御事ハ申に不及末〳〵ニ至るまて〕存る儘のお正月て御さる。扨毎もいちそく達へ。御節を申上座に御さる御方へハ嘉例て末広かりを進上致ス。その用意を致た事て御さるか先太郎官者を呼出シ承ふ太郎官者おるかい　太　ハア引　シ　有か引　太　ハア引　シ　居たかやい　太　御前に　シ　ねんのふ早かつた先立テ〳〵　太　畏て御さる　シ　扨何と思ふそ。毎も春と思へハ目出たい物ちや今年のよふな目出度よい春ハないなア　太　御意被成る、通りいつ〳〵よりも御目出度い御正月て御さり升　シ　其通りちや。扨毎もいちぞく達へ。御節を申上座ニ御さる御方へハ嘉例て末広かりを進上す。其用意ハ有つたかいナア　太　ハア。大方の物は見当りましたか左よふな物は見当りませぬ　シ　そちか知らすハまた調ぬて有ふ　最早近日の事なれは用意をせすハ成るまい　爰元にはない汝は太儀なから京へ行テ末広かりを求て来い　太　アノ私か都江参り升か　シ　ヲ、太儀なから行て呉い　ハアせんたい私ハ都へ参りとうこさるに此様な幸ひな事はこさらぬ　太　畏て御さる　シ　夫は一段ちやちと好かある　太　夫はいか様な御好て御さる　シ　先地紙よふ骨にみかきをあて、要しつとミしてされへさつとした書を求て来い　シ　六ツケ敷い御好てハ御されとも畏て御さる　シ　左右あらハいさ呉い　太　ハア引　シ　エイ引　太　ハア引　シ　エイ　太　ハアのふ〳〵嬉しや〳〵一段の事を被仰付た先急て参ふ。誠ニ某は是迄縁かのふてついに都へ行た事かなかつたか此様な幸な事はない。〔ついてなから爰かしこの名所旧席をも見物致て参ふと存る〕イヤ何角いふ内に都そふなハミア賑やかな事かなこりやはや都の町そふな　扨も〳〵聞及たよりハ家居抔ものきをならへてきれいな事ちや。是ハ

如何な事。某わその末広かり屋の所ハ存せぬア、在所てとくと尋ねて来れハよかつた物を。京へ行と被仰たか嬉しさについわすれて来たどんな事をした。といふても。此はる〳〵の處を問ひニも戻られまいし。何んとした物て有ふそ。ハミアさすかハ都ちや売買ふ者も呼はれハ。物毎と、のふと見へた。さらハ某も此当りから呼はつて参ふ。シミ申　そこ元に末広かり屋は御さらぬか末広かりか求たふ御さる末広かをふ末広かり屋はごさらぬか　広末かり買ふヤアのふ〳〵そこ元に末広かり屋は御さらぬか末廣かりか求ふ御さる　ス　是ハ洛中に住居する心のすくにない者て御さるあれへ田舎者と見へて何やらあつはと申　ちときやつにたつさわつて見よふと存るヤアのふ〳〵のふそこな人る　本　ハア、こちの事て御さるか　ス　如何ニもそなたの事ちやそつじなから此広い海道を何をあつはとおしやるてハない　事ニ依たらハかなへてもおましよふかといふ事ちや　ス　いや〳〵りやうじをおしやるといふてとかむ様ニ呼はつてありく事て御さる　ス　して其末広かり屋の所を知ておひやるか　本　夫は忝ふ御さる某ハ末広かりか求たさにケせぬニ依てケ様ニ呼はつてありく事て御さる　ス　是ハ身共かあやまつた　扨〳〵そなたハ仕合な人ちや　本　ヤ仕合と申てもこふ見へた通りの者て御さる　ス　イヤ〳〵そのよふな袖妻に付た仕合てハない某にあわやつたか仕合といふ事ちや　本　ハアそなたに逢ふたか仕合とハ何んとした事て御さる　ス　ふしん尤ちや洛中ニ人多しとハ言へ共そなたの御尋ある末広屋は身共壱人て御さる　本　アノこなたか末広かり屋の御亭主て御さるか　本　中〳〵　本　すれハ身共か仕合な者て御さる　左右あらハ末広かり求とふ御さる見せて被下　ス　如何ニも見しよふしはらくそれニ御待ちやれ　本　心得ました　ス　田舎者をまんまとたはかつてハ御され共何を末広ちやといふて売てやらふものかない是先何とした物て有ふそいや致しよふか有たのふ〳〵お居やるか　本　是におり升　ス　さらハ末広かりを見せう　〔本　どれ〳〵見せて被下ハア、此よふな傘の事ては御さらぬ其末広かりを見せて被下　ス　是か末広かりておりやる〕　本　ヤアあの是か末広かりて御さるか　ス　中〳〵　本　夫ハ傘てハ御さらぬか　ス　いかにも傘ちや　本　とハ何んとした事て御さる　ス　扨はそなたハしんしつ末

広かりをお知やらぬと見へた追付末広にして見せう　太ムウ　見せて被下　ス夫りや〳〵〳〵　ス何んと
と好か御さる　ス末広かりに　太成程　ス夫ハ如何様な御好ちや　太ならふかの　太誠ニ末広りに成りました　扨て夫ニハち
してされ絵さつと背たを求て来いと申されました　太別の事も御さらぬ先地紙よふ骨にみかきを当て、要しつと、
〳〵く御好ニ合せて見しよふ　先地紙よふと言ふは此紙の事　常のハそ、ふな紙てはれとも是は唐紙の上ミを持てはつたニ依て是お見やれ此よふニこん〳〵するハ　太ムウ　ス骨にみがきを当て、といふも此骨の事　日本一の細工人か信濃と草むくの葉を持て此骨所を七日七夜ツ、みかれたに依て是お見やれ　是よふニすへ〳〵するハ
太成程　ス要しつと、してといふも此要の事　是をこふしていつ方へ御出被成る、と有つてもきつくりともする事てハおりない　太また御座るそや　ス エミされ絵な　太中〳〵　ス成程合点ちや夫は其方のかなか違ふた何方へ御出被成る、と有つても此へてされてつかハさる、ニ依てのされへ絵てハおりない　太成程きこへましたこと〳〵く御好によふ合ました求ましふか代物たいか程て御さる　ス五百疋ておりやる〔太夫は余り高直に御さるもそつとまけて被下　ス イヤ〳〵末広かりにおいてまけハないイヤならハおかしませ　太いかニも求ませう是へ被下　ス心得た〕　太扨代物た三條の大黒屋て渡すて御さらふ　ス大黒屋そんして居るあれて請取ておりやらふ　太もふこふ参る　ス是〳〵　太何て御さる　ス其方ハ余りきみのよい買てちやみやけをおませう　太夫は忝ふ御さる是へ被下　ス イヤ〳〵其様に手へ渡す物てハない見れハそなたも主持そふなみやけをおましよふ夫ハシわるい時も有る物ちや其機嫌のわるかつた時さつそくなをるはやし物をおしへておまよふといふ事ちや　太夫ハ忝ふ御さるおしへて被下　ス ひそかに教ふ是へ寄らしませ
太心得ました　ス といふていかニも拍子ニ懸つてはやさしませさつそく御機嫌の直る事ておりやる　太やれ
如何ニも覚へました　ス そうあらハもふこふ参る　ス最早お行きやるか　両人さらハ〳〵〳〵
〳〵嬉敷や〳〵　一段の末広かりを求た　先急て参ふ　誠ニ某は此度都始ての事なり其上末広かりといふ物を知らす迷

惑致ス処一段之末広かりを求て此よふな悦はしい事ハない頼ふた御方に御目に懸けたらハ嘸御満足被成るゝて有ふ
イヤ何角といふ内に戻た　先是ハ爰に置て頼ふた御方御さり升か　イヤ太郎官者か戻たそふな戻たか〳〵
御座り升か〳〵　戻たか〳〵　御座り升か〳〵　戻たか〳〵　御さり升か
エイ太郎官者　ハア　戻たか　唯今帰りました　ヤレ〳〵早かつた何ん末広かりを求て来
たか　一段と末広かりを求て参りました　夫ハ出来いた　急て見せい　畏て御さるさらハ末広か
りをお見ニ懸ませう　とれ〳〵ハア是ハ汝ハ都へ往てから傘を求て来たかそふ別都は物か上手ちやか能い細工
ちやナア　ハア随分念の入つた末広かりちやと申ました　ヤア何に是か末広かりちや　左様て御
さる　とハ何とした事ちや　扨は此方ニハ末広かりを篤と御そんしないと見へました　遣はされませ
追付末広かりニ致てお目ニ懸ませう　そりや〳〵〳〵　是ハ如何な事　何と〳〵〳〵〳〵末広かりニ成
りませうか　あのすれは夫を末広かりちやと思ふてかうて来たか　いかにも念のいれた末広かりて御さ
ると申ました　扨ミうつけたやつのすれハ都てぬかれてうせおつたな　如何な〳〵ぬかれてハ参りませ
ぬ　夫ならハ好は何とちや　そつともおき遣ひハ御さりませぬこと〳〵く御好みに合せて参りました先
ツ地紙よふといふハ此紙の事常のハ麁そふな紙てはれ共此は唐紙の上ミを持てはりましたニ依て是こらふしませ此よ
ふニこん〳〵致しまする骨に磨を当てと申も此ほねの日本一の細工人か信濃と草むくの葉を持てこの骨一本を七日七
夜ツゝみかれたニ依て此様ニすへ〳〵致升る亦要しつとゝしてと申も此要の事是をこふして何方へ御出被成るゝと有
てもきつくりともする事てないと申ました　己また有ふかな　エゝされ絵な　おんてもない事
追付致て御目にかけませう　扨も〳〵うつけたやつかな　やつとな　是りや何んとする
やつとな　何とするそいやい　笑　そつとも御気遣ひハ御さり升せぬ是ハ此方のハかなか違ひま
した何方へ御出被成るゝと有ても此絵てされて遣わさるゝニ依てのされゑ絵てはないと申ました　言語道断
悪いやつのむまん〳〵とぬかれて来おつた己かよふなうつけた者ニハ重而の為ちやいふて聞かせう末広かりといふは

何ちやと思ふこんほん扇の事ちやわいやい　太ハア　シ是〳〵ハ常の扇末広かりと言ふハ是より末のくわつとひらひたを末広かりといふ地紙よふといふも此紙の事骨に磨を当てといふも此骨　要しつとゝしてといふハ是此の要の事ちやわいやひ　太ムウ　シ又され絵といふハたとへハ一方ニハ秋野の草尽を書また一方ニハ唐子なんとの花にたわむれ遊ふていを書たをこそされゑとも言ふすれ　何そやそのから傘の柄でざるゝと有てされゑてあらふよふハ　太あのすれは末広かりと申ハ扇の事て御座り升か　シおんてもない事〔　太是ハ如何な事　ア私もはや傘を末広かりといふハ何とやら合点の行かぬ事ちやと存て御され共余り都の者か是を出しまして末広かりちやと申升其上御好ニもよふあい升したニ依て　扨ハ傘を末広かりとも申かと存てかうて参りました　シまたそのつれをぬかす都の者か何んといへはとて夫をかうてうするといふ事か有物か〕　太左様ならハ此方も亦仰られよふかわるう御さる　シ何かわるい　太はて扇ならハ扇ちや末広かりといふは常の扇とハ違ふさきのひらいた扇の事ちや程に其先のひらひた扇をかうて呉いと被仰付るれハよふ御さるニ只末広かりと斗り仰られてハ我人なんの事ちややらも存ませぬ　是ハあなかち私の不調法てぬかれて参つたてもないかと存升　シ己ハ慮外なやつのりこん立をぬかしおるしさりおろ　太ハア　シしさりおろ　太行ます　シあちへうせよ　太ハア　シしさりおろ　太ハア　シしさりおろ〳〵〳〵　太ハ、、、ア引　シ悪くいやつの　太以ての外の御機嫌ちや　いかさま昔からから傘をついに末広かりといふた事かない是りや身共か扇といふ事を知らなんたかあやまりちや扨都のやつか何やら面白おかしういふてむまん〳〵とたましおつたはやぬかれたハ是悲かなひか扨此御機嫌ハ何として直した物て有ふそア、さすかハ都の者ちやぬかハ只ぬかひて早速直る拍子物をおしへてくれた何ニとやらて有たか　ヲ、夫ミ笠を差なる春日山〳〵是も神の近ひとて人か笠をさすなら我れも笠をさそふよけニもさありやよかりもそふよのとやら言ふ事て有た　先拍子ニかゝつていふて見よふ　口伝有　シ笑　太郎官者か某の機嫌を直そふと思ふてはやし物をする面白い事の　笑　是りや出すハなるまい如何ニや〳〵太郎官者　太そりや〳〵御声ちや〳〵　シぬかれたハにくけれと拍子物か面白い先内へ入て鯨の酢をホウ〳〵はつて諸

白を呑やれ　笑　太　笠を差すなる春日山是も神のちかいとて人か笠をさすなら我も笠をさそふよ　シ　とかくの事ハいるまい内へ入てさしかけ　太　是も神のちかいとて人か笠をさすなら我も笠をさそふよけニもさありやよかりもそふよのふ〳〵シヤキリ留ル

入間川

シテ　遙か遠国の大名　訴訟の事有て在京致処に何事も願の儘に相叶安とのみきやう所頂戴し新地ヲかつと拝領いたし剰へ御暇まて被下た　先太郎官者を呼出シ悦はしよふと存る　如常　シ　汝呼出ス別の事てない　そちか知る通り永ミ在京する所に訴訟毎ミく相叶案堵の御行所頂戴し新地を過分に拝領したか何と目出度事てハないか　太　扨ミ夫ハ御目出とふ存升　シ　また悦はす事か有る　太　夫ハいか様な事て御さり升　シ　其上御暇まて被下たか何と嬉敷ハ思わぬか　太　夫は重〳〵御目出とふそんし升　シ　扨御暇を被下た事なれは近日下ふと思ふか俄ニ旅の用意か成ろふか　左　何か扨夫ハ何れ御下り被成るミ事て御さるニ依て若シケ様の事も御座らふと存て常〳〵用意致て御されハそつとも御気遣ひハ御座りませぬ　シ　何といふそ　いすれ下る事なれハ此様な事も有ふと思ふて常ミ用意したといふか　太　左様て御さる　シ　扨ミ何から何迄気の付た頼もしい者ちや　左右あらハ片時も早ふ行たいニ依て今たちたいか何と有ふ　太　只今も申升通りて御されハ御気遣ひハ御さりませぬ　何時成共御立被成ませ　シ　ヤレ〳〵夫ハ嬉敷　左右有らハ追付立ふ程に其用意をして呉い　太　畏て御さる　シ　其太刀を持て　太　ハア御太刀持ました　シ　イサ行ふサア〳〵来い　太　ハア　シ　誠ニ国元を立時分ハ大勢供を召つれたれ共何れもふ奉公て得しとけなんた　汝はしんめやうニ勤た程に国元へ行たらハ取立てとらせうそ　太　夫ハ忝ふ存升　シ　先馬に乗せうそ〳〵　太　難有ふ存升　シ　乍去乗つけぬ者か馬に乗れハ得て落る

と聞た牛ニ乗ふそ　太夫は兎も角もて御さる　ジ何兎も角もちや　太ハア　ジ笑　こういふも馬に乗る迄に取立てとらせうといふ事ちや　太夫ハ難有ふ存升　ジ此様に訴訟叶ふて下る事ハ知らす国元てハ嘸いつか〳〵と定而待て居るて有うなア　太御意被成るゝ通り御待兼被成るゝて御さりませう　ジハミアヤイ〳〵富士か見ゆるハ〳〵　太誠ニ富士か見へ升　ジ扨も〳〵見事な事かな　三国一の銘山を今某かほむるハ愚かなれともいつ見ても〳〵見あかぬよい山ちやナア　太御意被成るゝ通りて御さる　ジすれハこゝハ駿河の国か　太左様て御さる　ジ国元へハ程近ひ急ケ〳〵　太ハア　ジ千里の行も一歩よりおこるといふかさのみ急くよふニハなけね共嬉敷〳〵と思ふ故か道はかの行事ちやナア　太左様て御さり升　ジイヤとつと来たれハ大キな川へ来た　太誠ニ川へ参りました　ジ登りにも渡たかいナア　太私も覚へませぬ　ジ折節上か降たと見へて水かにこつて渡り瀬か知れぬ　辺りに誰もをらぬか見い　太ハア誰もおりませぬ　ジイヤあれへ何者やらゆく　詞を懸ふ　太よふ御さりませう（ワキ柱ノ先ニテ名乗）　何是は入間の何某て御さる　ジヤイ〳〵川向への者に物問ひヤアイ　何扨ミ世にハ大へいな者か有るあのよふな者ニハかまわぬかよい　ジ今こち向たか聞へぬと見へた最壹度呼ふ　太よふ御さりませう　ジヤイ〳〵川向への男ニ物問ひヤアイ　何最早堪忍の成る事てハないこちからも申様か有るヤイ〳〵こちの事か何事ちやヤアイ　ジ何事ちやヤイ太郎官者太刀をおこせ　太先御待被成ませ　ジ待とハ何と　太御国元てハ此方を存ており升か爰もとてハ存ぬニ依ての事て御さる　御言葉を御直し被成たらハよふ御さりませう　ジムウ是ハ尤ちや左右あらハ言葉を直そふ　太よふ御さりませう　ジ申〳〵川向への御方に物か尋ふ御さり（ニ）　何笑　されハこそ言葉を直したこちからも直さすハ成まい　申〳〵こちの事て御座るか何事て御座るそ　ジ何事て御さるそ　笑　ヤイ〳〵昔から問ひ声よけれハいらへ声よいといふか言葉を直したれハきやつも直したわいやい　太左様て御さる　ジ先川の名を尋ふ　太よふ御さりませう　ジ申〳〵此川ハ何と申川て御さるそ　何是ハ入間川と申　ジ扨は武蔵の国て御さるの　何左様て御さる　ジ向の在所は

何 入間の在所　方〳〵の御仮名は　何 名もない者て御さる　イヤ〳〵御しんたいと見うけまし
た名のないと言事ハ御さるまい平ニ言わせられい　何 はつかしなから入間の何某て御さる　フウ腹を立た
こそ道利なれ　入間の何某ちやといふわいやい　太 左様ニ申升　渡り瀬を尋ふ　太 よふ御さりませう
申〳〵此川ハとこ元を渡れハよふ御さる　何 其事て御さる以前ハ此処を渡りましたれ共今ハ瀬か替て拾八
丁上か渡り瀬てこゝ元ハ深ふ御さる　何と言わせらるゝ以前ハ此処を渡つたれとも今ハ瀬か替つて十八町上か
渡り瀬てこゝは深いと言わせらるゝか　何 左様て御さる　シテ是ハ入間川て御さるの　何 中〳〵入間
川て御さる　ヤイ〳〵太郎官者渡り瀬か知れたさあ〳〵身拵へをして渡れ　太 爰ハ深と申升　イヤ
〳〵汝はしるまい身共は聞た事か有る気遣ひないサア〳〵渡れ〳〵　太 申爰ハ深いと申升　是ハ入間川て
御さるの　何 如何ニも入間川て御さる（シテ柱よりワキサエハタル）　申〳〵爰ハ深ふ御さる太郎官者おとめやれいの
太 申〳〵爰ハ深と申ます　向の在所は入間の在所　方〳〵の御仮名は入間の何某　何 申〳〵爰ハ深ふ
御さる是ハ如何な事フウあふない扨ゝおしやうしや〳〵爰ハ深と申にお渡り被成て扨も〳〵おしやうしや　お
直りそへ　せいはい致す　何 是りや何とおしやる　何と、ハ身ニ覚へか有ふ　何 覚へハないか何とお
しやる　最前川の名を問たれハ入間川とハ言ぬか　何 何某ちやニ依て何某と申た　何 入間川ちやニ依て入間川と申た　又そちか家
名と問は何某とハ言わぬか　何 何某ちやニ依て何某と申た　惣して昔から入間様といふてそな事をそてな
いといゝそてない事をそちやと言事を入間様といふ　渡り瀬を問たれハ爰は深ふて上かあさいといふた　其深いとい
ふか入間様て浅い事ちやと思ふて渡たれハ諸さむらいにほしうもない水をほつても呑せた　御直りそへせいはい致す
何 先御待被成（ニニ）　待とハ何と　何 扨ハ其方ニハ入間様を御遣ひ被成るゝの　ヲゝ扨遣ひ申
何 某も年久ゝ敬う此所に住とも左様の事を存せぬ　御せいはい被成るゝと有は御しん実て御さるか　おん
てもない事　何 迚の事ニ御せいこんて承りたい　くどい事をいふ弓矢八幡討て捨申　何 やら心易（ヤス）やさ
つと済た　太郎官者　太 ハア　今某かせいはいせうといへは迷惑かりそふな物かやら心易やさつと

済たといふわいやい　太　左様ニ申升　シ　合点の行ぬ事ちや様子を尋ふ　太　よふ御さりませう　シ　のふ〳〵今某かせいはいせうと言か迷惑かりそふな物かやら心易やさつと済たとは何とした事ておりやる　何　此方ニハ入間様を御遣い被成るゝてハ御座らぬか　シ　ヲミ扨遣ひ申　何　されハ其御せいはい被成りやうと有か入間様て御せいはい被成ぬ事ちやと存てやら心易やさつと済たと申事て御さる　シ　フウイヤ是ハきやつか道利ちやわいやい　太　左様て御さります　シ　扨ミぬからぬ事を言ゝ出した　是ハきやつハ中〳〵面白そふなやつちやか何と命を助ふか　太　御た助被成たれハ定メて悦ひませう　シ　イヤそふあらハ助て入間様を聞ふ　太　よふ御さりませう　シ　左右あらハこちも言様か有るヤアのふ〳〵中〳〵其方ハ面白ふもない人ちやに依て命を助るてもないそ　何　おしうもない命を御助も被成ねハ　シ　フウ　何　忝ふも御さらぬ　シ　何ちや忝のふも御さらぬ〳〵　笑　ヤイ命を助かつて忝ふないといふわいやい　太　左様て御さり升　シ　此扇をやろふ扇を　太　よふ御座りませう　シ　ヤア是〳〵此扇は京折てもないか其方にやるてもないそ　何　ハア京折てもない　シ　ムウ　何　被下も被成ねは　シ　夫ミ　何　しうちやくニも存せぬ　シ　存せぬ〳〵　笑　ヤイ物を貰ふしうちやくニもないといふハ　笑　中〳〵面白やつちや　シ　此太刀もやらう　太　よふ御さりませう　シ　ヤアのふ〳〵此太刀かたなハ重代てもわさよしてもないかおますてもないそ　何　是ハ思ひも寄りました　シ　出来た　何　重代てもわさよしてもない太刀かたなを　シ　夫ミ　何　被下も被成ねハ　シ　夫よ　何　忝ふも御さらぬ　シ　又くわした　笑　扨〳〵面白い事ちやサア〳〵汝も何そやつて入間様を聞ぬか　太　私ハ何も遣る物ハ御さりませぬ　シ　ア、最そつと何そ遣たい物ちやか　イヤ此着て居る物を遣ふ　太　是ハ御無用ニ被成ませ　シ　イヤ〳〵くるしうなひ早ふぬかせて呉い　太　左様ならハ心得ました　是ハ御無用ニ被成たらハよふ御さりませう　シ　此正しんの入間様を聞に何のおしい事か有うサア〳〵早ふぬかせい〳〵　太　ハア心得ました　シ　ヤア是〳〵此小袖上下ハぬれもせぬかやるてもないそ　何　忝ふのふも存せぬ　シ　存せぬ〳〵〳〵　笑　扨ミ能いなくさみちや　何　是ハ思ひも寄らぬ仕合をした　案内なしにいのふと存る

ヤアのふ〳〵のふそこな人　何て御さる　其方ハとれへお行きやる　何もふこふいにます
イヤ爰な者か　いぬるといふ事か有る物か　用か有る御帰りやれ　何も用ハ御座るまいか　ハテ
用かあると言わゝ先ちよつと御帰りやれいの　何ハテ何も用ハ御座るまいか　扨其方ハ其ことく色〻の物
を貰ふて真実嬉敷か嬉敷うないか　何いかニも忝ふも御座らぬ　イヤ〳〵夫は入間様ちや　その入間様を
さらりとのけて真実嬉敷か嬉しうないかといふ事ちや　何爰は聞処て御さる　入間よふをのけてて御さるか
ヲヽ扨　何何か扨此ことく色〳〵な物を貰いまして嬉敷ないと申事か御さらうか　いかにも忝のふも御さ
らぬ　忝ふも御さらぬ　イヤ爰な者か是ハ身共をなふるそふな　何是ハ何とおしやる　何と〻いふ
事か有る物か　何是ハ如何な事　真実を言わぬ内はとつちへもやらぬそ　何ちや真実を言わぬ内は
とつちへもやらぬ　ヲヽ扨　何ヤのふ此方も思ふても見させられい　此ことく小袖上下太刀刀扇まて貰ま
して何しに嬉敷うないと申事か御座らうそ　せふ〳〵せゝ身にあまつて忝ふ存る　何ちや存る　何中〳〵
夫は心実か　何誠ちや　一丈か　何おんてもない事　のふ入間様をおのきやれといふか
入間様ておのきやるなといふ事ちや　嬉敷ハうれしうない事てあらう　こちへおくさしませ　何ア、是〳〵一た
んくれた物を取かへすといふ事か有る物か　成らぬそ〳〵　何あのわけもない其様なとふよくな事か有る
物か　成らぬそ〳〵　何あの大ちやく者やるまいそ〳〵　成らぬそ〳〵　何やるまいそ〳〵

シテ　大名　ナシウチのしめ　素袍着こみひのしめ　下袴

アト　太郎官者　如常

〃　何某　長上下

入用　太刀